

【講評】

山科醍醐こどものひろば演劇部ぼっぷ・こーん『オズの魔法使い』

大人と子どもが一緒になって、ほぼ全てを創りあげる舞台というのは、実はなかなか鑑賞する機会がありませんでした。今回の歌ありダンスありアクションシーンありのとてもにぎやかな舞台で、登場する役者が大人も子どもも全身で演じることを楽しんでいるようだったのが、観ていて気持ち良かったです。

子どもが大人と共にひとつのものを創り上げるというのは、得難い経験であると思います。幕間トークで、「芝居をしていて楽しいところ」に「いろいろなメンバーと稽古できること」という意見がありました。自分の主張あるいは自分の個性を、子ども通しだけではなく大人に照射して考えることができる、貴重なコミュニティであることがうかがえました。「しんどいところ」では、「役作り（人間じゃない役をどう演じるかなど）」と答えがありました。これも見方を変えれば、大人と子どもで共に考え、創りあげていく楽しみのひとつととらえることができると思いました。

演出では、ライトで照らされた一本の筋を橋に見立てたり、自作の怪獣が登場したりと、随所に工夫が見られて感心しました。ただ、もっと舞台の広い空間を生かした美術があると、にぎやかな歌やダンスをより華やかにしてくれたように感じました。背景がかなりシンプルで、セリフでの場面説明で済ませてしまっているところが多く、その点がもったいなかったです。マットのみを用いるにしても、例えばその高低差をもっと活用する動きにするなどしたほうが、ストーリーの進行にメリハリがついたと思います。

登場人物は、子どもが主体となって脇を大人が固め、コミカルとシリアスの場面を演じ分ける力量のバランスが安定していて良かったです。もし可能ならば、例えば登場人物の主演と脇役を子どもと大人で逆転させて、それでいて子ども主体でストーリーが進行していくような創り方もチャレンジしてみると、また違った発見があるのではないのでしょうか。

「共に創る」ことの大部分は、「共に考える」ことが占めていると思います。子どもと大人が互いにアイデアを出し合う姿勢を持ち続け、これからも観客を巻き込んだ楽しい舞台を創造していくことを期待しています。

西恵野（大阪大学演劇学）